

平成19年度鳥取県人権協働ネットワーク「ミニシンポジウム」実施事業
とっとり県民カレッジ連携講座



拉致問題シンポジウム

報告書

日時 2007年 **10月31日(水)**
16:00～18:00

会場 鳥取短期大学

主催／拉致問題ミニシンポジウム中部地区実行委員会

拉致問題シンポジウム報告書 目次

まえがきにかえて	1
NPO法人サカズキネット 副会長 西 谷 昭 良	
拉致問題シンポジウムプログラム	2
参加者の声	
アンケート集計結果	3
アンケート感想より	5
鳥取短期大学学生レポートより	10
実行委員所感	13
実行委員長 河 本 結 花 (鳥取短期大学国際文化交流学科2年生)	
NPO法人サカズキネット運営委員 豊 田 幸 弘	
倉吉市人権政策課 課長補佐 廣 谷 静 枝	
NPO法人サカズキネット会員 田 村 閑 美	
鳥取短期大学地域交流センター長 中 嶋 邦 彦	
報道の記録	17
日本海新聞、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞 切り抜きより	
商工だより2007. 12月号より	
拉致事件の理解のために	
拉致問題の経緯	19
鳥取県内の拉致事件等	20
拉致被害者松本京子さん	21
拉致問題シンポジウム実行委員会の組織、編成	22
人権協働ネットワーク（ミニシンポジウム）実施事業の概要	
拉致問題シンポジウム実行委員会組織、当日職務分担体制表	
編集後記	

まえがきにかえて

本事業に、地元NPO法人として参加できたことを、先ず感謝したい。やはり物事は一人の人間から一人の人間へと心・志が伝わって行われ、広がって行くものらしい。

今回も、西部に於ける実行委員長、妹原氏と友人関係にある当地豊田君へ1本の電話を入れた事から興った。豊田君から西谷、清水眞理君へと連なり、NPO法人サカズキネットメンバーへと伝えられ、以降、三つの構成団体・各々の担当していただく、中嶋、雛倉、廣谷氏の絶大なるパワーの持ち主の方々に依って瞬く間に組織は形成されてしまった。県の担当である古田係長には、10度に亘って打合わせに足を運んでいただいた。更に、今回最も重要視していた、地元の若者に対するアピールを目指した我々の期待に応えたのが、短大2年生の河本結花さんの「実行委員長、引き受けます！」の一言であった。彼女自らの意志を以って身を乗り出してくれた“出来事”はこの事業の推進に関わっていた我々をどんなにか勇気づけてくれた事だろうか！ 後に聞けば、県東部の遠方から通学し、毎日ハードな日々を送る彼女の生き方は、三倍の歳月を有している我々に思わぬ“カツ”を入れてくれたのかも知れない。（恐ろしい位に・・・）

とにかく良かった。彼女と一緒に参加してくれた森本 愛さんにも有難う。

事業の原点に帰って記すべきことがある。

日本海を隔てた向こうに犯罪遂行を国家として実施し続けている北朝鮮がある。そこに我らの同胞が誘拐され束縛され続けている。現実を忘却してはならない。許してはならないのだ。県中部の若者を中心とした二百数十名の参加者とスタッフ共に、声を挙げ続ける決意を今一度強く想い、松本京子さんの一日も早い奪還を期待したい。

NPO法人サカズキネット副会長 西 谷 昭 良

拉致問題シンポジウムプログラム

総合司会 NPO法人サカズキネット理事 倉 繁 正 隆

挨拶

16:00

拉致問題ミニシンポジウム中部地区実行委員会委員長 河 本 結 花
鳥取短期大学 国際文化交流学科2年

映画上映

16:05～

めぐみ — 引き裂かれた家族の30年 (上映時間 90分)

親の愛は、世界を動かす。

“拉致”という国家的陰謀に巻き込まれてしまったふつうの家族。

それから30年…

娘を取り戻したいという強い思いが、人を、国を、世界を動かしていく。

1977年11月15日の朝、いつものように学校へ出かけた当時13歳の少女が忽然と姿を消した。その時から平和だった日々が一変。横田さん一家は帰ってこない娘を探し続けあらゆる事態を想像しながら、彼女の無事を祈り続けた。その実態が<北朝鮮拉致事件>という途方もないものとは思ひもしないで…。

それから30年。怒りや悲しみに包まれながらも娘の生存を信じ続け、娘を取り戻すための果てしない闘いの日々が続く。その家族の凛々しくも懸命な姿は強い力で人々を巻き込み、やがて国家までも動かしていく…。

アメリカ人ジャーナリストが描いた、ニュースでは届かない家族の愛の物語。この感動的で衝撃的なドキュメンタリーを撮ったのは、クリス・シェリダンとパティ・キム監督夫婦。それぞれがジャーナリストの顔を持つ二人は、この驚くべき真実と横田さん夫婦の愛と勇気をしらせたいという一心で製作に取り組んだ。アカデミー賞受賞監督ジェーン・カンピオン(「ピアノ・レッスン」)も製作総指揮に加わり仕上がった本作は、数々の映画祭で大絶賛を受け観客賞などを受賞、2006年度アカデミー賞ドキュメンタリー部門の最有力とも噂された、ハリウッドも注目した普遍的な愛の物語です。

対 談

17:35～

まつ もと はじめ
松本京子さん実兄:米子市在住 松本 孟さん

せ はら ひとし
特定失踪者問題調査会 妹原 仁さん

進行 NPO法人サカズキネット会員 田 村 閑 美

展 示

パネル写真の展示 A館1階 ロビー

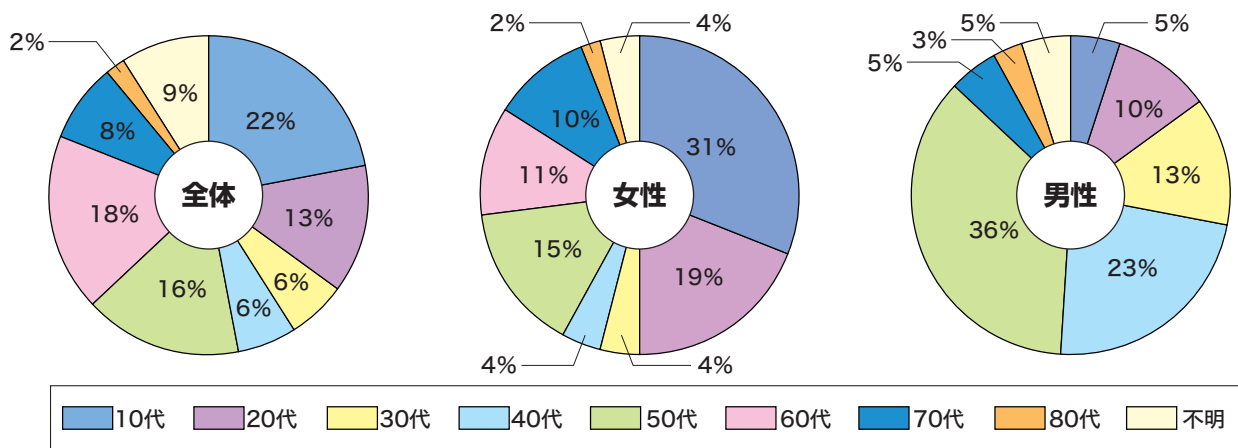
参 加 者 の 声

●アンケート集計結果

参加者の年代

(単位：人)

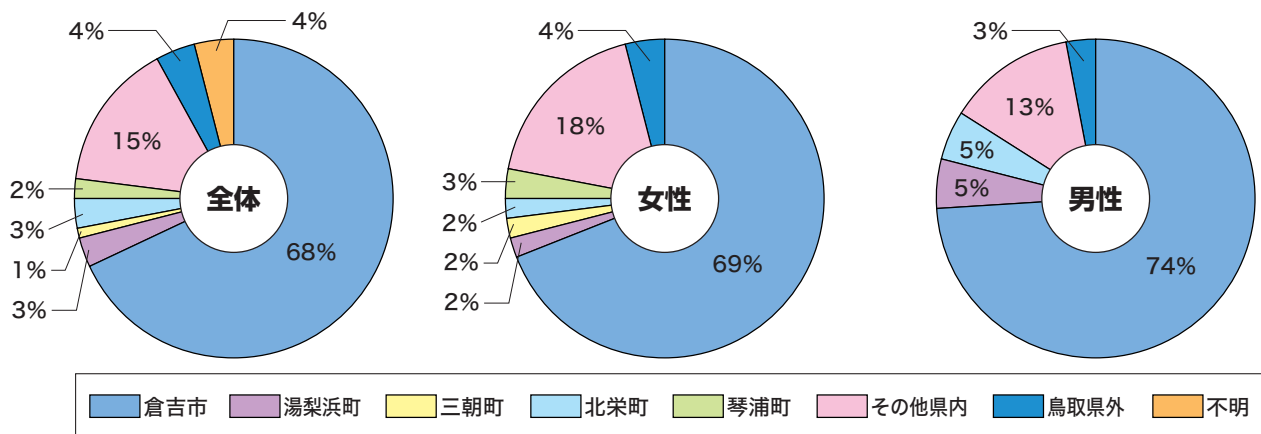
区分	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明	計
女性	29	18	4	4	14	10	9	2	4	94
男性	2	0	4	5	9	14	2	1	2	39
不明	0	0	0	0	0	1	1	0	7	9
計	31	18	8	9	23	25	12	3	13	142



参加者の住所

(単位：人)

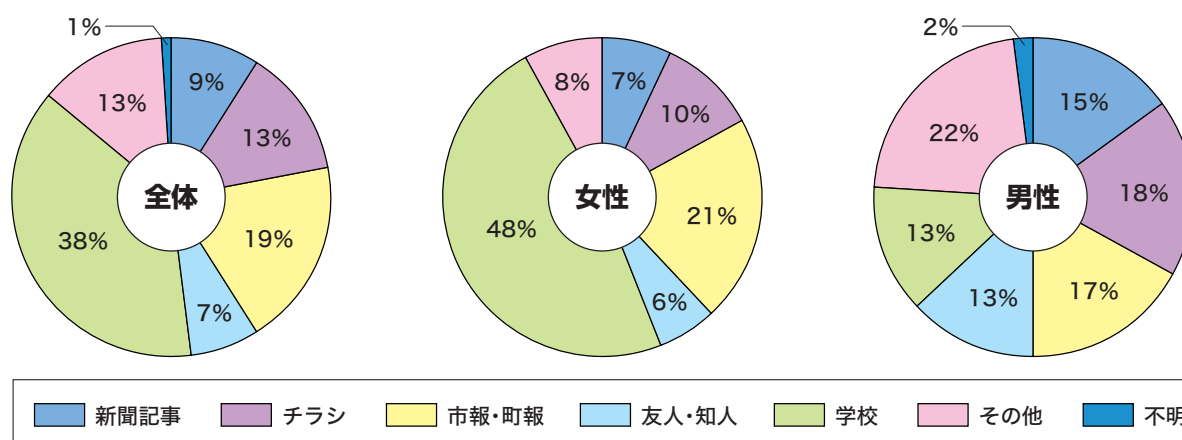
区分	倉吉市	湯梨浜町	三朝町	北栄町	琴浦町	その他 県内	県外	不明	計
女性	64	2	2	2	3	17	4	0	94
男性	29	2	0	2	0	5	1	0	39
不明	3	0	0	0	0	0	0	6	9
計	96	4	2	4	3	22	5	6	142



このシンポジウムを何で知りましたか？

(単位：人)

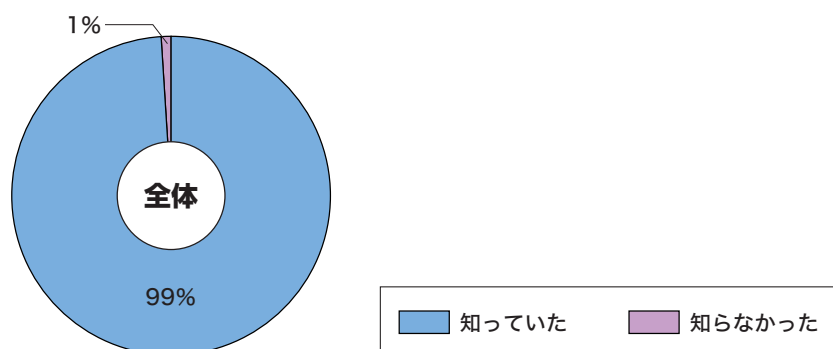
区分	新聞記事	チラシ	市報・町報	友人・知人	学校	その他	不明	計
女性	7	11	22	6	52	9	0	107
男性	7	9	8	6	6	11	1	48
不明	1	2	2	0	4	1	0	10
計	15	22	32	12	62	21	1	165



以前に「拉致問題」を知っていましたか？

(単位：人)

区分	知っていた	知らなかった	計
女性	93	1	94
男性	39	0	39
不明	9	0	9
計	141	1	142



●アンケート感想より



1. 映画を観ての感想をお願いします。

○ はじめからすごく胸の痛むものでした。自分の身に置きかえてみて、とてもとても心が痛み、苦しい問題であると思いました。何と言っているのか、本当に、本当に心が痛いです。
(16歳・女)

○ 拉致問題をとても身近に感じました。横田めぐみさんや拉致された方々が日本へ1日も早く帰って来て欲しいと心から思いました。
(18歳・女)

○ 拉致というのは、絶対に許せることではないと思った。拉致問題というのはニュースぐらいでしか知らなかった。連れ去られた家族の人たちの悲しみなど、すごく苦しく涙が出そうになりました。早く横田さんをはじめ松本さんやその他の人たちが日本に戻ってこられたらいいなと願っています。
(18歳・女)

○ 私はまだ産まれてない時にあったことで、今考えたら、とてもありえないことだと思いました。なぜ、拉致された人たちは、そういうことになってしまったんだろうと思います。
(18歳・女)

○ 北朝鮮に対しての怒り、日本政府に対して、憎さ、悲しさでいっぱいです。被害者家族の方が何十年も日本に戻れるよう頑張ってるけど、両親をはじめ高齢になられている、早く認定されてない方も含め拉致された人全員を助けなければと感じました。

(18歳・女)

○ 拉致について今まで深く考えたことがありませんでした。私が生まれる前のことなのであまり実感がなかったです。しかし、映画を見て、拉致の重大さに気づくことができました。拉致されたご家族の気持ちが痛いほど伝わりました。

(19歳・女)

○ いろいろと考えさせられました。もっともっと、みながこの現実をしっかりと知ることが大切であると思います。ありがとうございました。

(45歳・女)

○ 北朝鮮に対して激しい怒りを覚えます。何が行動できるか!!考えさせられ、考えたいと思う。

(60歳・女)

○ 涙が出て仕方ありませんでした。拉致された沢山の方々、本当につらい思いで、生活を今もしておられる事と思います。自分の身になっ



たらと思うととてもつらく感じられます。どうぞ皆様頑張って下さい。応援しております。
(65歳・女)

○ 過去の問題ではない。今も続いている重い問題を改めて知ることが出来た。(66歳・女)

○ 家族の方の長い間の苦しみ、政府、国に対しての働きかけをみるにつけ、何とか解決につながる方法はないのだろうか、解決してほしいと願わずにいられない。あらためて何の罪もない人たちの普通の生活、夢、希望が失われてしまったことへの怒りを強くした。
(不明・女)

○ これまで、いろいろな報道を通じて、この問題を聞き知っているが、さらに知らない情報を、この映画から知ることができた。この問題が報道されるたびに、北朝鮮とこれまでの日本政府への怒りとショックを感じる。その解決の難しさにもまた怒りを感じてやまない。
(60歳・男)

○ ドキュメンタリー、事実を追うことの大切さを感じた。
(62歳・男)

○ 改めて強い怒りを感じた。国家による拉致という犯罪を許すことはできない。1日も早くめぐみさんが両親のもとに帰ることを願っている。
(不明・男)

○ 拉致被害者の家族の両親がお元気の間に早く帰してあげてほしい。涙が出てしょうがなかった。とても良い映画でした。(69歳・不明)

2. 今回の集会に参加して、 拉致についてどう思いましたか？

○ 今日、このシンポジウムに参加するまで、拉致って怖いと思うほどでしたが、今日参加したことにより、考えがかわりました。
(16歳・女)

○ 北朝鮮はひどい国だと思った。拉致された人が早く帰ってきて欲しいと思った。
(18歳・女)

○ いきなり拉致されて朝鮮へ連れていかれるのは怖いと思った。
(18歳・女)

○ なにも悪くない人がなぜ拉致され、現在の生存もはっきりしないのか、北朝鮮という存在について知らなくてはと思いました。
(18歳・女)



○ 「拉致問題」について知っていたが、あまり意識することはなかった。ですが、今回の集会に参加することで、自分の中の拉致の重大さに気づけたと思います。
(19歳・女)

○ 許せないことだと思った。ここまで、政府等は何をしてきたのか…あまりの月日の長さに、私自身も同じ日本人としてはずかしさと無力さを痛感した。
(45歳・女)

○ 許しがたい行為!! 国、政治家はもっと真剣に考えて行動して欲しい。国会議員、増元さんに当選して欲しかった。(60歳・女)

○ 1番最初に知った時は、そんなことあり得るかと思った。段々あちらこちらで報道され事実と分かった、北朝鮮はとんでもない国だと思ったし、今、更にその思いが強い。(66歳・女)

○ 国家的な犯罪行為と感じた。許しがたいこと。(不明・女)

○ 信じ難いこの現実、けしからん。素直な思いです。(62歳・男)

○ 北朝鮮による国家犯罪に対して怒りと被害者の家族の悲しみを思い、居たたまれなかった。(不明・男)

○ 北朝鮮、金正日をぜったい許す事は出来ない。拉致被害者の方全員の帰国を早くしてほしい。(69歳・不明)

○ ご家族の方々、友人、その人につながる人、また、そうではない人にとっても問題であると思います。とても心が痛むことで、自分の立場になって考えると、とてもやりきれない思いになりました。(16歳・女)



○ とってもこわいイメージを通りすぎて、自分がやられていたら、何とも言えない状態だと思いました。(18歳・女)

○ 改めて拉致問題を自分の問題としてとらえ直さねば。(62歳・男)

○ 拉致は本当に許し難い問題であると思いました。拉致された当本人はもちろん、家族や周りの人々までもがとても辛く、苦しい思いをすると改めて感じました。(19歳・女)

○ ゆるせない!! (19歳・女)

○ 一刻も早く解決しなければならないと思った。(20歳・女)

○ 私のまわりにも、私自身にもおこり得る問題であると感じた。(20歳・女)

3. 今後、拉致問題についてどのような行動をして行きたいと思いますか？

○ 今まででは遠い所での問題だと思っていたが、米子で拉致された方もいると聞き、他人ごとと思えなくなりました。出来ることは限られているけど、拉致問題に関心を持ってこれからの生活を送ることも良いなら、それだけでもやって行きたいと思いました。(18歳・女)

○ この問題をもっと身近に考えること。(18歳・女)

○ 今は、何もできなけど、何か出来ることがあるのであれば、少しでも役に立ちたいです。(18歳・女)

○ 拉致問題についての事をたくさんの人、小さな子にも伝えたいです。(18歳・女)



○ 自分1人で何か行動をおこすということは、とても難しいと思います。もしかしたら何もできないかも知れません。ですが、拉致について何かできることがあるという思いも大切だと思いました。(19歳・女)

○ 私ひとりの力は本当に小さな小さな砂つぶのようなものですが、出来ることは精一杯やっていきたいと思います。(45歳・女)

○ 松本さんが拉致された事実は、私たち県民の誰におこっても不思議ではないと前から思っていた。募金とか（誰でもできる）したらどうだろうか。金銭面で市民の援助を受けたいと思います。行動するにはお金がいると思います。(60歳・女)

○ 時間のゆるす限り参加したいと思います。(65歳・女)

○ 他人事ではない、共に考え行動していかなければならない問題だということを覚え、常に関心を持って見守ること。その中で何か出来るか示されることがあると思う。無関心が一番いけないこと。(66歳・女)

○ 妹原さんの発言のように世論を変えていける行動のひとりになりたいと思います。(不明・女)

○ 通っている高校で人権問題を取り扱う部に入部しているので、関係性のとても深い拉致問題も積極的に取り組み、たくさんの人に伝えたいです。(16歳・男)

○ 具体的には何もできないが、被害者が1日も早く解放され帰国されるよう応援してゆくだけである。(60歳・男)

○ 常に関心をもつこと。日本の対応を考え発信すること。(62歳・男)

○ 政府にもっと真剣に解決の努力を求めるよう行動したい。事件発生当時から北朝鮮の工作員の仕業だと知っていた、ということが言われているこの問題を永く放置していたとすれば、この国の人権意識が問われるように思う。(不明・男)



4. その他、感想等お願いします。

○ ご家族の方々、また、そうでなくても、この問題につながる人たちに何か力になればと思います。なれるものなら…。思いがあまりすぎて上手く書けませんが、私は、私の人生をしっかりと生き、困っている人があれば、必ず力をかそうと思いました。ありがとうございました。(16歳・女)

○ 今日、このシンポジウムに参加して良かったと思います。自分に出来ることは限られていますが、今後拉致問題を解決するために動かれている方々を応援したいと思います。

(18歳・女)

○ 知らなかったことがたくさんあった。残された家族は、とても辛い思いをされていることが分かった。いろいろと考えさせられた。

(18歳・女)

○ とても身近なことだと今日改めて思いました。拉致問題はそのままにしてはいけない、みんなで考えて動かないといけないと考えました。

(18歳・女)

○ 今回の集会で拉致について深く考えさせられました。自分には関係ないと思っていましたが、いつ自分の身に何が起きるかなんて分かりません。自分にできることは、限りなく少ないことだと思いますが、何かできると信じていたいと思いました。

(19歳・女)

○ 世論が大切という事を痛切に感じた。

(60歳・女)

○ 早く拉致問題が解決する事を願っています。皆さんお年を取っておられますから、生きておられる内にお帰りになる事を願っています。

(65歳・女)

○ 忍耐強く、理性的に、冷静に取り組んでおられる横田夫妻、拉致された方達のご家族の方々の強さ、愛の深さに心打たれた。地道な活動が実を結ぶ日を心から祈る。

(66歳・女)

○ よい機会をいただいて感謝しています。対談の時間をもう少しとっていただけたらもっと良かったと思います。

(不明・女)

○ 鳥取の拉致被害者の松本京子さんのお兄さんのお話で、自分達の無力感も含め、とてもつらく、悲しい思いで生活しているということで、こんな拉致問題を起こした人達に怒りを感ずいます。そして自国を美化して隠し続ける北朝鮮には疑問を感じます。

(16歳・男)



●拉致問題シンポジウムの一環として、10月23日から31日まで、鳥取短期大学A館1階ホールにて、拉致事件に関するパネル展示を行いました。写真はその一部です。

●鳥取短期大学 学生レポートより

幼児教育保育学科1年 涌田知佳子

映画を観て受けた印象は「恐かった」です。家族の方の苦しみは、私の想像以上のものだと思います。その苦しみが何十年も続いて、本当に辛いことだと思いました。連れ去られた時のことを想像すると、どんなに恐ろしくてどんなに不安だったことでしょう。北朝鮮が、拉致被害者について8名死亡と伝えましたが、その死因が、自殺、有毒ガスで死亡、水害で死亡というのはあきらかに不自然です。そして、松本孟さんが「私たちには、誕生日もお盆もクリスマスもない。そのことを話すと涙が出てくるから話せない。」と言っておられたのを聞いて、やはり家族を失った悲しみは計り知れないほどだと感じました。早くこの問題が解決してほしい。私たちにできることは、まず身近な人に伝えていくこと。日本人である以上、日本で起こっているこの問題を知ることが大切だと思いました。



幼児教育保育学科2年 池田有衣

私が生まれる10年も前から拉致問題が起き始めていたのに今でも解決していない事に驚きと怒りを感じました。しかも日本海側ばかりで被害に遭っていると分かった瞬間、とても他人事ではないと実感し、恐怖も感じました。

突然なんの前触れも無く自分の大切な人がなくなるなんて想像がつきません。事故や病気などで急死して涙するよりも辛い事だと感じま

した。たとえ生きているとしても、どこでどんな姿でいるのか分からないと生きた心地がしないと思います。横田夫妻は30年も悲しみを背負って、今でもそれが続いていると思うと涙が止まりませんでした。普通の家庭と同様に過ごすはずだった30年の時を戻せるものなら戻してあげたい。1人で拉致され当時まだ13歳だっためぐみさんの時間を返してほしいです。この時代になっても、戦争やテロ、拉致が起こるのはおかしいし、文明ばかり発展しても人の心が善悪の判断もつかないようでは、いい世界にはならないでしょう。人は誰かと関わって生きていく動物なのに、自分には関係のない事だと思っ

ていてはなんの解決もない、映画を見て本当にそう思いました。人の痛みを分からない人間が人の上に立つことはあってはならないことです。政府は国民の代表なのに国民の為にどうしてすぐに動かないのか不思議さと怒りを感じ、所詮、他人事にしか思っていないのではないのでしょうか。しかし、それでも横田夫妻を中心にご家族のみなさんがあきらめなかった事で、戻ってこれた人達もいたので本当によかったと思います。私が実際にテレビで見た時は、影で家族が苦勞していた事を知らずにただテレビのニュースだ

としか考えていませんでした。しかし、今回のシンポジウムに参加したことで、何か考えていかなければならないと思いました。ご家族のみなさんに早く笑顔とやすらぎが戻ってくる事を願います。

* * * * *

幼児教育保育学科2年 永井美沙

この拉致問題シンポジウムに参加するまで、私は拉致問題のことをそれほど深刻にとらえていませんでした。今回のシンポジウムも友達に誘われなければ行かなかったでしょう。私にとって拉致問題は「昔のこと」とずっと思っていました。しかし、今回の拉致問題シンポジウムで、自分はなんてヒドイ考えをしていたんだと



感じました。映画を見て、拉致された方の親族の人が写っていました。とても悲しそうな声や顔で拉致被害者の名前を呼んでいました。会いたくても会えない、それはどんなに苦痛でまた、悲しいことでしょう。なぜ何も悪いことをしていない人々がこんなに苦しまなければいけないのだろうと、見ていてとても心が痛みました。今もまだ拉致問題は解決していません。何人もの人がいまだ日本には帰ってこられないまま親族の人と離ればなれです。私はシンポジウムを見ながら、何か自分にできることがないか一生懸命考えていました。しかしいくら考えても私にできることは何もありません。本当に何もありません。今回のシンポジウムにおられた松本さんも「私たちにできることは何もない」と言っておられました。ただ見ていることしか出来ない。目の前に苦しんでいる人がいるのに、苦しんでいる理由も分かるのに何もできない。なんて歯がゆいことでしょう。しかし松本さんは「ただ忘れないことが大切」とも言っておられました。確かに何もできないのかもしれない。でも拉致被害者の人を忘れないということは私でも誰でもできます。私はこれからも拉致のことを絶対忘れません。いつか拉致被害者の方たちが日本に帰ってくることを心から待っていようと思いました。

今回の拉致問題シンポジウムを見て、拉致問題への見方が変わってきました。この後も自分がシンポジウムを見て思った気持ちを忘れずにいようと思いました。

幼児教育保育学科2年 山根里沙

以前から映画があることを知っており、見てみたいと思っていたので今回のシンポジウムに参加しました。

私は、拉致問題について新聞やニュースで見っていたので、ある程度知っているつもりでした。しかし、今回映画を見て、自分の中で拉致問題について軽く考えていたことに気がきました。映画では、拉致された時の様子を再現しており、目隠しや手錠をされ袋に入れられたり、車から手だけ出しておいでおいでをしたなど、その時の様子が頭の中に浮かんできてとても恐かったです。もし自分が拉致された立場だったなら、どれだけの恐怖を味わったのだろうと思いました。元工作員の話では、人殺しから盗みまでさまざまなことを学んでいたと言っており、本当に信じられませんでした。そんなことを学ぶ必要性がどこにあるのか全く理解できません。その他にも、その元工作員が拉致を実行した人から聞いた話として、めぐみさんが拉致されたときの情報を話していましたが、それを知った家族は、ますます怒りが大きくなるのではないかと感じました。私は、この元工作員が話しているのを見て不快を感じました。

映画の後の対談で、松本さんが、拉致問題のことを話せないことが一番苦しいと話され、本当に日々辛い思いをしておられることを実感しました。

今回参加して、家族の方がどれだけ必死に拉致問題について訴えてきたのか分かりました。また、どれだけの辛い日々を過ごしているのだろうとじっくり考えてみると胸が痛みました。拉致問題の解決まではまだ時間がかかると思います。私に何ができるのかわからないけど、このようなシンポジウムに参加することも意味があるのかなと感じました。今回参加して本当に良かったです。

幼児教育保育学科2年 高橋愛佳

私は以前テレビで拉致被害者のドラマを見たことがある。そのドラマは、拉致被害者の方の視点で作られたもので、あまりのひどさに言葉が出なかった。しかし、正直、その時私はこのドラマを見て、あまりに信じられないことばかりだったので、フィクションのドラマを見た気分で、見た後も、怖かったとしか受け止めていなかった。しかし、今回、拉致被害者の家族の方から実際に話を聞いたり、拉致被害者の家族の方の視点で作られた映画“めぐみ”を見て、家族の悲しみ、苦しみ、辛さ、不安が痛いほど伝わってきて、改めて拉致問題の重要さを感じた。特に映画の中の場面で、子どもが拉致された母親が病気になる、体も動かず、あまりしゃべれないのに、精一杯の力で、「やっちゃん、帰ってきて。やっちゃん、やっちゃん。」と何度も名前を呼ぶ姿が辛かった。また、連れ去られた家族が帰ってくるのを待っていても、30年も経ってしまったため会うことなく亡くなってしまわれた方もおられ、早く拉致被害者が全員日本に帰国して、元気な姿を家族に見せてあげて欲しいと心から思った。そこで私は、拉致問題が一刻でも早く解決するよう、何かできることはないかと考えた。松本さんは、正直、今私たちにできることは何もないが、一人でも多くの人々が拉致問題に関心を持ち、世論の力で、政治に圧力をかけるしかないと話された。私は、これから拉致問題に関心を持ち、家族や友達に話をしようと思った。



幼児教育保育学科2年 安藤瑛里奈

今回は、鳥取県中部地区で初めての『めぐみ』上映ということで、とても貴重な体験をすることができたように思います。

テレビのニュースでよく見る横田さん夫妻が映されていて、以前にテレビで、知っている人がいないかなどの呼びかけを必死で行っている様子もありました。そんな事を見ていると、本当に胸が苦しくなりました。テレビで見ている時は、自分には関係ないなどと思っていたけど、今日のシンポジウムを通して、拉致問題は意外と身近に存在しているものなのだと思うようになりました。もし自分が拉致されたら……。もし家族や仲の良い友だちが被害にあったら……。そんなことを考えていると、実際にそうなった本人や周りの人たちの気持ちは、どんなに苦しく耐え難いものだったのだろうと思いました。きっと、私たちでは計り知れないものに違いありません。

私は、今まで特に不自由することなく、19年間生きてきたけど、こういった被害で苦しんでいる人たちの存在をしっかりと心に刻んで、忘れないことが必要なのだと感じました。そして、今の自分にできることは、世論を動かすための力となっていくことだと思うので、世の中を見つめてどう動くか、しっかりと考えないといけないと思いました。拉致問題について考える中で、自分がどうすべきか、どう生きるべきかなども考える良い機会となったので、このシンポジウムに参加して良かったです。

幼児教育保育学科2年 上山真季

これまで拉致について真剣に考えてみたことがなかった。ニュースで、横田めぐみさんの両親が出ていても「北朝鮮は何のために拉致するのだろう？」と疑問に思うばかりで自分から知ろうとしていなかったように思う。今回、シンポジウムに出てみて、実際に松本孟さんの話を聞き、『めぐみ』の映画を見て、拉致はいつどこであるか分からない、私だっていつ拉致されてもおかしくない状況にあるのだと思った。決して他人事ではない、身近な問題であった。また、映画の中で、北朝鮮の大学では、人殺しから盗みまで学ぶと言っていた。とても信じられないことだったし、そのような国に、未だ拉致され続けている被害者の方の不安は、私には計り知れないものがあると思った。そして、その家族の日々は長くつらいものなのだと思う。拉致被害者家族もだんだん高齢となり、増元さんのお父さんは解決を待たずに亡くなってしまった。早く、早く、この拉致問題を解決していかなければならない。拉致被害者家族の方の笑顔を、松本孟さん、京子さんの笑顔が見たい。まずもっと知り、考えたい。拉致に関する記事やニュースを見たら、きちんと見たいと思う。拉致問題は私たちにとって、決して遠いものではない。同じ日本人として拉致被害者の方が一日でも早く、一時間でも早く戻ってきてほしい。拉致問題を、これからも考えていこうと思う。解決するまで時間がかかるかもしれないが、しっかりと自分も目を向けていこうと思う。



●実行委員所感



「拉致問題シンポジウム」実行委員長を務めて

鳥取短期大学国際文化交流学科2年

河本 結花

10月31日の拉致問題シンポジウムの開催で、私は実行委員長を務めました。このシンポジウムで上映された『めぐみ』の映画はとても衝撃的なものでした。拉致問題について普段あまり関心はなく、ただニュースで流れている情報を表面的に見聞きしているだけで、実際どうして拉致がおこったのか、拉致問題がどれだけ重い問題なのか理解していませんでした。このような私ですが、映画を観て改めて怒りがこみあげてきました。私だけでなく会場にいた皆さんもそうだったのだと思います。上映の間に何人もの人が泣いておられました。家族がある日帰ってこなかったら、いつも一緒にいた友達が異国の地へ連れていかれたのだとしたら、自分はどうしていたのだろうか。横田夫妻の娘に対する大きな愛に涙し、人の命にかかわることなのに動けない政治の矛盾への怒りや悔しさを感じました。今、拉致問題は日本にとって最も大きな問題の一つになっています。政府も本気になって、関わるようになってきているので、早期の解決を願っています。映画『めぐみ』の上映をして、また、鳥取県の拉致被害者松本京子さんのお兄さんの切実な声も聞くことができ、微力ながらもこのシンポジウムの開催に向けて参加できて、私自身貴重な体験となりました。ありがとうございました。

「拉致問題シンポジウム」を終えて

NPO法人サカズキネット運営委員

豊田幸弘

北朝鮮に拉致されたまま帰らぬ人達の日も早い救出を願って、鳥取県中部で初めて開催した今回の拉致問題ミニシンポジウムでした。

開催するにあたり、倉吉市・鳥取短期大学・NPO法人サカズキネットの3団体実行委員会、いくつかの重要な点を共通認識し、官・学・民の協同作業により、開催主旨の成果をあげることを確認し合い、スタートしました。

まず重要な点の第1は主に誰を対象にして開くか？第2に対象者が大きな関心を持ってくれる運営内容とは？そして第3は、それに一番適した場所はどこか？という事でした。

拉致被害に遭って30年以上も経過すれば、家族の方々は高齢になり、その声は年々か細くなっています。しかし、けっしてこの事実を風化させてはならないし、記憶に留め続けなければなりません。

それで特に10代、20代の若い世代に、救出の為に力強い支援者になっていただきたいと願い、対象者を高校生、短大生を中心に一般市民への広報活動を展開していきました。実行委員長席に短大2年生の河本結花さんが就くことで、学内と実行委員会に圧倒的存在感を示す事になりました。

次に内容の点では、映画「めぐみ」の上映は来場者に強いインパクトを与えたと思います。微動だにせずスクリーンに見入っている人、悲しみの涙を流す人、拳を握り締める人、誰もが被害者の声無き悲痛な叫びと、家族が置かれた状況の不条理さに心を痛めたに違いありません。

この「めぐみ」を見て、その後、松本京子さんのお兄さんのお話を聞いて何を想い、何を感じ、どう行動したいか？……147枚のアンケートに書かれた感想文は私達の予想を超えた感動の文章でした。(参加者250名)

学生が参加し易い場所としては、鳥取短大の

大講義室以上の好条件は他に無く、会場提供と市民の交通手段に短大のバス提供を快く引き受けていただきました。また、学生参加推進のため多方面にご尽力いただいた鳥取短大と鳥取短大地域交流センターの皆様には感謝致します。

また、拉致問題を重大な人権問題と位置付け、市報・市回覧広報活動や高校生送迎用マイクロバスの提供準備等で支えていただいた倉吉市人権政策課の皆様には感謝致します。

いつもながら、軽やかにお手伝い下さったNPOサカズキネットの友達に感謝致します。

終わりに、市民をはじめ、多くの若い人達を集めて盛会のうちに終了したシンポジウムでしたが、この報告書が県中部における拉致問題解決を考える、新たな第一歩になれば幸いです。ありがとうございました。



「拉致問題シンポジウム」を取り組んで

倉吉市人権政策課 課長補佐

廣 谷 静 枝

拉致問題シンポジウムを開催するお話が出てからわずか4ヶ月間の中で、鳥取短期大学・NPO法人サカズキネットそして倉吉市が力を合わせて取り組みを行うことができたのは、一つにこのリーダーが鳥取短期大学の学生であったこと。二つに実行部隊がNPO法人サカズキネットであったことが成功の鍵になりました。ねらいとして、特に若い世代の皆さんに、正しい理解と自らの問題として理解を深めるために行われたものであり、参加者の年代の幅が広がったことは、大きな成果でした。

行政として、拉致問題に関する啓発を進めることは、「第10次倉吉市総合計画」における施策として「一人ひとりが尊重され、誰もが参画できる地域社会の実現」につながるものであり、今後も市民、事業者の皆様と手を携えてあらゆる分野で人権尊重の理解を深めていくことが必要だと感じています。

そして、皆さんから温かで熱意に溢れたパワーを頂いたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



「拉致問題シンポジウム」対談によせて

NPO法人サカズキネット委員

田 村 閑 美

鳥取短期大学大講義室満杯の中、映画「めぐみ」上映後、涙が乾く間もなく対談が開催されました。米子市の拉致被害認定者松本京子さんの実兄松本孟さんと、特定失踪者問題調査会常務理事の妹原仁さんのお二人をお招きしての対談です。先ほどの映像「めぐみ」での熱く切ない思いを引き継いで、生の声を聞く対談に対し、皆さんの真剣な表情が伺えました。

松本京子さん失踪から30年間という長い年月を考えると、私の想像を遥かにこえるものだと思います。29年待って昨年11月、ようやく政府から17人目の拉致被害者認定を得られたそうですが、「これは通過点にすぎません。これからです。」とおっしゃっていました。お兄さんの孟さんは、自分の辛さをあまりお話ししない方でしたが、その少ない言葉の奥に秘められたご苦勞を思うと、なんとももどかしくジレンマを強く感じてなりませんでした。そして、特定失踪者問題調査会の妹原さんがいらっしまったからこそ、拉致認定を受けられたという経過をお聞きし、妹原さんのご努力に敬意を払わずにいただけませんでした。妹原さんの活動がなければ、松本京子さんは今もただの失踪者なのです。全国には未だ、失踪者のままの拉致被害者が何百人もおられるそうです。その方達を拉致被害者と認定すること自体、大変な経

過、努力が必要な事を改めて認識させられました。今の世の中に考えられないような不条理な事がまかり通り、それに対し進展性のない状況・・・、なんとも面映く悔しさが込み上げてきます。突然、自分の大切な人がいなくなったら・・・、自分が拉致されてしまったら・・・、他人事ではなく、身近に起こっている事に対し、もっと国民が真剣に怒り、早急な解決へと導いていかなければと切に感じます。松本さんは、拉致の現実を一人でも多くの人に伝えて世論の盛り上げにつなげて欲しいとおっしゃっていました。なんとも謙虚で、それだけでいいの？と会場の皆さんも思われたに違いないと思います。身内の事を自分から～して欲しいと、お願いしづらいと言う事を後で聞きました・・・その重みがズッシリ響きます。

今回のシンポジウムでは、若い方達にも沢山聞いて頂きましたが、皆さん、もっと自分に出来る事はないの？ 力になりたい！ と怒りがみなぎるパワーになっているのを感じました。その気持ちを持って、たとえば署名運動でも起こすなど・・・。聞くだけのシンポジウムであってはならないのではないかと思います。そしてこれは、拉致被害者関係者だけの活動であってはなりません。北朝鮮に近い鳥取県などは特に、見過ごす事のできない問題と再認識して頂き、県や国をあげての早急な人権問題の取り組みへとつながる事を望みます。そのためにも、個々が力を出し合い、アクションを起こして行くという必要性を、対談後も強く感じています。一人の力は非力だけど、何千、何万人の声にして行くために欠かせないのが、その一人だという事を忘れることなくいたいと思います。

「拉致問題シンポジウム」の アンケートを読んで

鳥取短期大学地域交流センター長

中 嶋 邦 彦

今や日本の重大な課題の一つになっている「拉致」についてのシンポジウム(映画『めぐみ』の上映と拉致被害者の対談)が鳥取短期大学で開催されました。アンケートの中にも「なぜ短大で？」という疑問もあったように、もっと便利な所のほうが一般市民の集まりは良かったでしょうが、主催された「NPO法人サカズキネット」の方々の主旨は、短大生のような若い人たちに関心を持ってほしい、ということでした。その意味では定員250名の大講義室が本学の学生を中心としてほぼ満杯でしたし、アンケートからも10代20代の参加率は35%でしたから、目的はある程度達せられたといえるでしょう。

アンケートの結果については、まず、多くの方々が「めぐみ」という映画にショックを受け、怒りを感じておられました。「涙が止まらなかった」「怒りがこみ上げた」「他人事とは思えない」などという声が多くありました。中には「この映画はもっと多くの人に見せるべきだ」という意見もありました。

「拉致問題」そのものについては、特に若い人たちのコメントとして、「これまであまり深刻に考えなかったがこれを機会に考えたい」とか「改めて拉致問題を自分の問題として捉えたい」などと、意識の変革を自覚したコメントが多く、頼もしく思いました。その他 「平和ボケしている場合ではない」とか、「効果的な行動が出来ない政府に苛立ちを覚える」「政治家の意識を考慮して支持する」など政府や政治家に期待する声も多くありました。

今後の行動についても、「早速今夜家族に伝える」「募金に協力したい」「常に関心を持ち続けたい」などがあり、今回のシンポジウムが何らかの形で参加した人々に火をつけたことを実感し、開催した意義があったと確信しました。

2007.11.1 毎日新聞

7年(平成19年)11月1日 木曜日

日 本 海

拉致問題考えるシンポ

松本京子さんを「忘れず応援を」

兄の孟さんらが対談

倉吉・鳥取短大

北朝鮮による拉致問題について考えるシンポジウム

ウムが31日、倉吉市福庭の鳥取短期大で開かれた。同短大や倉吉市などで行われる実行委主催で、約200人が参加した。特定失踪者問題調査会によると、県内では77年10月21日、米子市和田町の松本京子さん(当時29歳)が自宅近くで行方不明となった。拉致問題が表面化して、母の三江さんや兄の孟さんらは拉致の可能性を訴え続け06年

11月、政府により拉致被害者として認定された。シンポジウムでは、77年に拉致された横田めぐみさんの両親を追ったドキュメント映画「めぐみ」引き裂かれた家族の30年」を上映。続いて孟さんと、妹原仁・同調査会常務理事が対談し、孟さんが「私には何もできない。皆さんにお話しするだけ。松本京子のことと忘れず応援して」と

話し、妹原常務理事も「拉致問題の解決は最終的には政治の力。そのためには世論、皆さんの協力が必要」と呼びかけた。同調査会によると、県内出身者では古都瑞子さん、矢倉富康さんと69年に行方不明となった上田英司さん(当時20歳、伯耆町)の3人が、拉致の可能性を否定しきれない「特定失踪者」とされている。【田辺佑介】

拉致解決へ「力貸して」

倉吉でシンポ 松本孟さんら訴え



拉致問題解決への理解と協力を求める松本さん(左)=31日、倉吉市の鳥取短期大学

「拉致問題シンポジウム」(拉致問題ミニシンポジウム中部地区実行委員会主催)が三十一日、倉吉市福庭の鳥取短期大学で開かれた。米子市の拉致被害者・松本京子さんの兄、松本孟さんと

特定失踪(ひっそつ)者問題調査会常任理事の妹原仁さんが対談し、松本さんは「拉致問題解決には皆さんの力が必要と、理解と協力を強く訴えた。シンポジウムは、北朝

鮮による拉致問題に対する県民の関心を高めようと企画され、市民や学生ら約二百人が参加した。松本さんは、拉致について「許したい問題」と厳しく非難。「私達には力がない。皆さん力を借りて国を動かし、北朝鮮に圧力をかける以外に解決の方法はない。『松本京子』を忘れることなく応援してほしい」と呼び掛けた。

妹原さんは、調査会が把握している鳥取県関係の失踪者は二十一人いるが、調査票が出ているのは十人のみであることを取り上げ、「あきらめないことが大切。政府を動かすには世論の力が必要で、世論は一人一人の力で、自分たちの問題

として関心を持つよう訴えた。会場では拉致問題を題材にしたドキュメンタリー映画も上映され、被害者家族の苦悩をつづった映像に涙ぐむ人も見られた。【田辺佑介】

た。同短大二年生の高橋愛佳さんは「家族の辛さが伝わってきて胸が痛くなった。これからは拉致問題に関心をもち、被害者の方の応援もしていきたい」と話していた。

2007.11.1 朝日新聞

「拉致問題に関心持つて」

倉吉でシンポ

北朝鮮による拉致問題の解決を訴える「拉致問題シンポジウム」が31日、倉吉市福庭の鳥取短期大学で開かれた。昨年、政府に拉致被害者と認定された米子市の松本京子さんの兄孟さん(60)が「拉致問題解決のた

め、皆さん一人ひとりが関心を持つて欲しい」と、学生や市民ら約250人と呼ばびかけた。同大学や市内のNPO法人などがつくる実行委員会が、県の委託を受けて催した。77年に北朝鮮に拉致された横田めぐみさん一家を取り上げたドキュメンタリー映画「めぐみ」引き裂かれた家族の30年」を上映後、松本さんが特定失踪者問題調査会の妹原仁理事と対談し、「拉致被害者の家族にはお盆もお正月もクリ

スマスも誕生日も、一切ない。皆さんの力を借りて国を動かし、北朝鮮に圧力をかける以外に方法はない」と強調した。

鳥取短期大学

キャンパス

Now

とりたん

拉致問題シンポジウムが行われました

10月31日(水)に、本学で鳥取県人権協働ネットワーク「ミニシンポジウム」実施事業として『拉致問題シンポジウム』が行われました。これは、NPO法人サカズキネット、倉吉市、鳥取県の担当者などと本学の学生教職員とが実行委員会を組織して企画・運営したもので、実行委員長を国際文化交流学科2年の河本結花さんがつとめました。拉致被害者横田めぐみさんを題材にしたドキュメンタリー映画「めぐみ」を鑑賞した後、「拉致問題の現状」をテーマに米子市の政府認定拉致被害者・松本京子さんの実兄松本孟さんと、特定失踪者問題調査会の妹原仁さんとの対談が行われました。会場となった大講義室には、学生や教職員をはじめ、高校生や多くの市民の方々が詰めかけ、超満員となりました。「拉致問題に関心を持って支援して欲しい」と松本さんが強く訴えると、参加した学生たちからは、「拉致問題は人ごとではないと思った。これからはもっと拉致被害者や人権のことを考えていかなければいけないと思った。」などの感想が聞かれました。



2007.11.1 読売新聞

早期帰国実現願う
鳥取短大でシンポジウム
倉吉市福庭の鳥取短大では、「拉致問題シンポジウム」(同市など主催)が開かれ、参加した約200人が被害者の1日も早い帰国の実現を願った。
拉致された横田めぐみさんを取り戻すために活動を続ける両親を描いた映画「めぐみ」引き裂かれた家族の30年が上映された後、倉吉市鴨河内の県立倉吉

米子市出身の拉致被害者・松本京子さんの兄、孟さんと、特定失踪者問題調査会常務理事の妹原仁さんが「拉致問題の現状」をテーマに対談。
孟さんは「皆さんの力がないと、問題は解決できない。関心を持って支援をしていただきたい」と訴え、妹原さんは「決してあきらめず、世論の盛り上がりで政府を動かしていくほかに道はない」と話した。

総合産業高1年上野真波さん(16)は「拉致被害者の家族の気持ちが伝わり胸が熱くなった」と話していた。

平成18年度鳥取県人権協働ネットワーク「ミニシンポジウム」実施事業
とっとり県民カレッジ連携講座

拉致問題シンポジウム

日時 10月31日(水)
2007年 16:00~18:00
会場 鳥取短期大学 A館
大講義室 (A309/4F)

拉致事件の理解のために

拉致問題の経緯（2001.3.8－2007.8.21）

2001(平成13)年

3. 8 北朝鮮に拉致された日本人を救うための全国協議会が、松本京子さん等5名についての拉致の可能性を含めた再調査を警察庁に要請

2002(平成14)年

9. 17 日朝首脳会談。金正日国防委員長が拉致を認め謝罪。帰国への便宜保証を約束
北朝鮮は、拉致被害者について「5名生存、8名死亡、2名入境せず」と日本側に伝える。
10. 9 鳥取県議会が「北朝鮮による日本人拉致事件の全容解明を求める意見書」を採択
10. 15 生存とされた5人の拉致被害者が帰国
10. 29 日朝国交正常化交渉会談（クアラルンプール）
～30 政府が松本京子さんについて情報提供を求めたが、北朝鮮は入境を確認できなかった旨回答
11. 4 県が松本京子さん御家族から真相解明を求める要望書及び署名を受領（9, 084名）
11. 8 知事が国に拉致を指摘される方々の安否確認と真相究明を要望
11. 11 県が総務部人権局に連絡・相談窓口を設置
11. 14 県が古都瑞子さん御家族から捜査を求める要望書受領
12. 4 県が矢倉富康さん御家族から真相解明を求める要望書受領

2003(平成15)年

1. 10 特定失踪者問題調査会が発足し、北朝鮮に拉致された可能性のある人40名（第1次リスト）を公表（松本京子さん、矢倉富康さん、広田公一さんが実名公表）
1. 15 元北朝鮮工作員安明進氏が、和田浜海岸を視察。本県関係3家族、救う会鳥取と面談し、知事を表敬訪問（本県関係失踪者に関する直接情報は得られず）
1. 24 県が御家族から上田英司さんの行方不明の説明を受け、救う会鳥取を紹介。
5. 30 特定失踪者問題調査会が、古都瑞子さんを含む62名を公表（第3次リスト）
10. 7 松本京子さんの兄 孟さんが訪韓し、元人民軍大尉と面談。「94年11月から97年3月までに4回、京子さんを清津連絡所で見かけ、96年5月には話をした」等の情報を得る。

2004(平成16)年

1. 29 松本京子さんの御家族が、米子警察署に告発状を提出（国外移送目的略取誘拐罪）
5. 22 第2回日朝首脳会談（日朝平壤宣言の履行を確認）
拉致被害者の家族5人（蓮池、地村両夫妻の子ども）が同日帰国
7. 18 曾我ひとみさんの家族が帰国・来日
7. 29 特定失踪者問題調査会が、上田英司さんを含む2名を公表（第9次リスト）

2005（平成17）年

1. 17 松本京子さんの兄 孟さんが、特定失踪者問題調査会と共に約5,200名の署名を添えて、内閣官房拉致被害者・家族支援室長に京子さんの拉致被害者政府認定を要請
3. 29 日弁連が、松本京子さんほか16人の真相究明を首相等に要望
5. 14 「北朝鮮による拉致・人権問題に取り組む法律家の会」が、鳥取県を現地調査

2006（平成18）年

10. 5 北朝鮮拉致問題早期解決促進鳥取県議会議員連盟が発足
11. 20 政府が、松本京子さんを拉致被害者として認定（17人目）
知事が、松本京子さんの早期帰国と本県3名の調査、認定を要望

2007（平成19）年

2. 22 参議院北朝鮮による拉致問題等に関する特別委員会が鳥取県で実情調査（米子市）
5. 29 知事が松本京子さんの早期帰国と本県3名の調査、認定を要望（拉致問題対策本部、7月に外務副大臣）
6. 6 特定失踪者問題調査会が、古都瑞子さん、矢倉富康さんを0番台リストから1000番台リスト（拉致の可能性が高いと同会が判断した者）へ位置づけることを公表
7. 9 特定失踪者問題調査会が、3月に平壤市内で撮影された矢倉富康さんによく似た男性の写真を公表
8. 21 古都瑞子さんの御家族が、米子警察署に告発状を提出（国外移送目的略取誘拐罪）

鳥取県内の拉致事件等

〔政府及び特定失踪者問題調査会資料より〕



特定失踪者 矢倉高弘さん(米子市出身)

1988(昭和63)年8月2日失踪(当時35歳)

一人で漁に出発して翌3日朝6時に帰港する予定だったが行方不明。海上保安庁と漁業組合が津来海域を捜索したが手がかりなし。8月10日竹島沖南緯度26°で漁船を発見。左舷前方に他の船と衝突した痕跡。3ヶ月前まで精密工作機械製作のエンジニアだった。



特定失踪者 上田英司さん(伯耆町出身)

1969(昭和44)年11月4日(当時20歳)

東京都又は京都府で失踪

失踪当日「京都に行ってくる」と家父に言い残して東京都内の下宿を去って行ったまま行方不明。荷物には紙袋一つだった。



拉致被害者 松本京子さん(米子市出身)

1977(昭和52)年10月21日拉致(当時29歳)

自宅近くの細み物歌亭によく通う時田家を出る。この夜、自宅から約200m離れたところで、松本さんと思われる女性と2人の男が話しているのを近所の人が目撃。片方のリンダルを盗したまま松本さんは姿を消した。



特定失踪者 広田公一さん

1984(昭和59)年7月21日失踪(当時28歳)

鳥取県へ大山登山に一人で出かけ、車は大山登山口西光川原駐車場に止めたまま失踪。警察犬は入山手経堂まで行くがそこから進まなかった。



特定失踪者 古都瑞子さん(日南町出身)

1977(昭和52)年11月14日失踪(当時47歳)

午後9時頃、旅館での仕事を終え一時帰宅。その後、首段層に着替え出かける。自宅には近く東京へ行くお符や、ハンドバッグ、現金、等に持ち合わせていたポケベルも置いてきたまま。





拉致被害者

まつもと きょうこ
松本京子さん

1977(昭和52)年10月21日

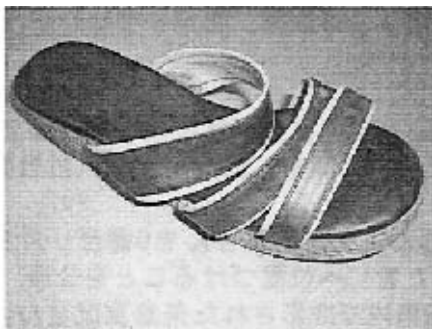
米子市内の自宅近くで拉致
(当時29歳、米子市出身)

失踪時の状況 —特定失踪者問題調査会の調査より—

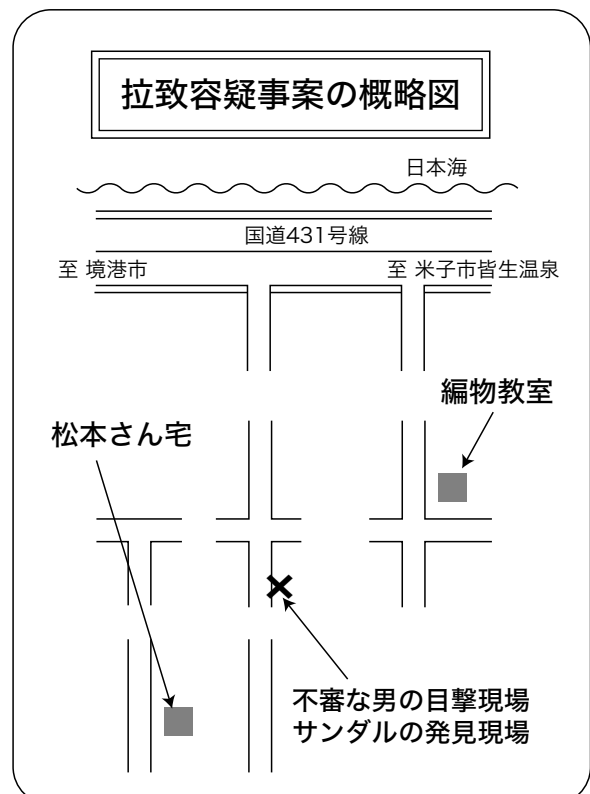
- ・1977(昭和52)年10月21日午後8時頃、自宅近くの編み物教室に行くと言って自宅を出たまま行方不明。失踪時は、紺色のスカートとチョッキ・白色のブラウス・サンダル履きという普段着で、現金は所持していなかった。
- ・この日の夜、京子さんの自宅から約200メートル離れた家の方が、裏庭で京子さんと見知らぬ男が会話をしているのを目撃している。
- ・男性は2人で、1人が京子さんと会話をし、もう1人は見張りをしているようだった。
- ・このとき、目撃者が「何をしている？」と男に声をかけると、1人が殴りかかり、額に縫うほどの怪我を負わせ、海岸の方向へ逃げている。
- ・通報を受けた米子警察署が男2人を傷害の疑いで追ったが、捕捉できていない。

失踪に係る不審な点

- ・海の方に向かって、何人かの足跡が残されていた。
- ・京子さんのサンダルが片方だけ残されていた。
- ・当時、警察が不審な電波の交信を傍受していた。



〈現場に残された京子さんのサンダル〉



拉致問題シンポジウム実行委員会の組織、編成

●人権協働ネットワーク(ミニシンポジウム)実施事業の概要

鳥取県総務部人権局人権推進課啓発教育係

事業主旨 県民と行政の協働事業として、県内で活動を行う団体が企画し、地元市町村と協力して実施する**委託事業**。

対象団体

住民と地元市町村により自主的に組織された団体で
かつ、地元市町村 + 2つ以上の団体

II

倉吉市 + 鳥取短期大学 + NPO法人サカズキネット
(生活環境部) (地域交流センター) (拉致問題担当委員会)
(人権政策課)

(具体的諸条件)

- 1) 委託金額は80万円を限度
- 2) 対象各費は講師謝礼、旅費、会場費、
広報印刷費、通信費等に限る

(事業実施期間)

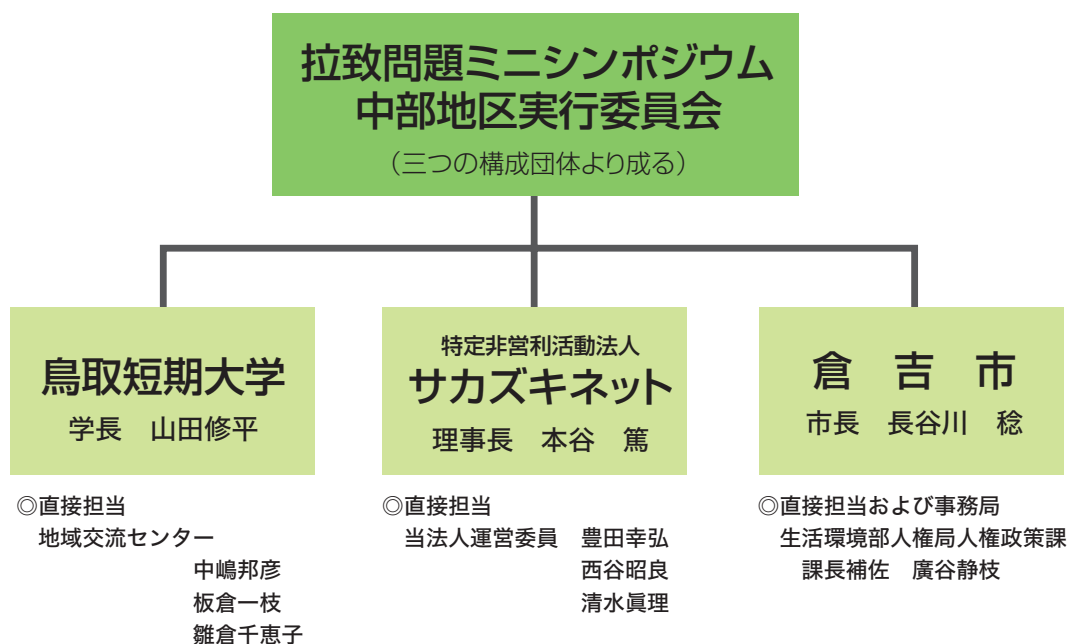
H19. 6～H20. 3末まで

(選考・審査)

- 1) 事業がもたらす啓発効果
- 2) 計画の確実な実効性
- 3) テーマ、地域、過去の事業実施状況

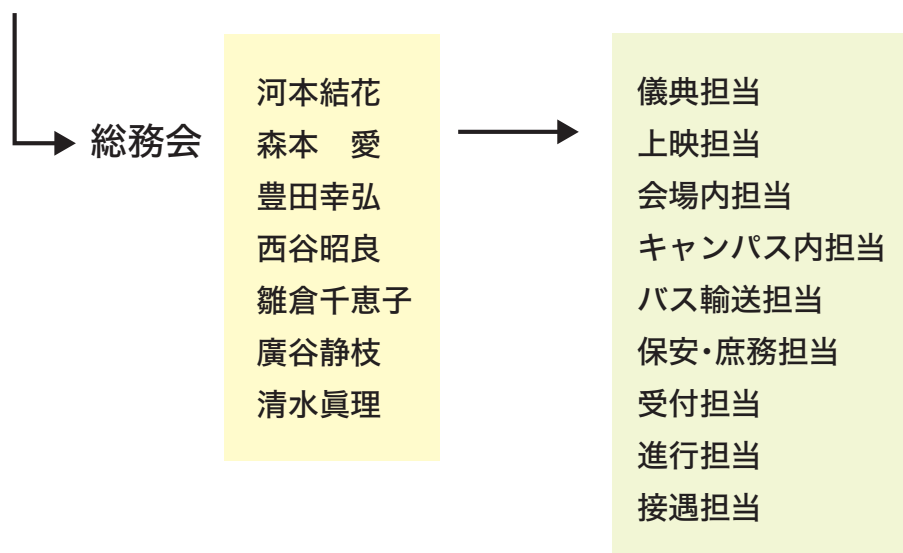
応募内容……当日参加者全員に配布した資料の通り

●拉致問題シンポジウム実行委員会組織



●当日職務分担体制表

実行委員長 河本結花(短大2年生)
同 補佐 森本 愛(//)



◎経費支出先(概要)

講師2名、警備会社、印刷会社、事務消耗品、上映委託、司会者技術オペ、その他

編集後記

拉致問題シンポジウムの企画について最初に相談を受けたのは6月下旬でした。そして7月、8月と、シンポジウムの日程・内容の決定、県への申請の手続きなど、諸々の準備がゆっくりと、確実に進んでいきました。そして9月上旬、鳥取短大の学生が実行委員長に名乗りをあげるにおよんで、このシンポジウムの、「若い世代の人たちに拉致についての正しい理解を」という当初の目的が、ゆるぎないものになりました。そして10月31日。果たしてどのくらいの人がこの問題に関心をもって参加してくださるだろうか、と不安いっぱい迎えた当日でしたが、高校生、短大生、一般市民の方々250名もの参加をいただくという、大きな成果がありました。スタッフとして関わった誰もが、「やってよかった。」「いい企画だった。」と大きな達成感を味わったことでした。

大満足のうちに打ち上げも済ませ、話し合いの資料や関係書類一式を書棚の奥深くに仕舞い込んだのもつかの間、報告書作成のための会議の招集がかかったのです。全体の構成や内容の決定、アンケートの抜粋、原稿の依頼・校正、写真や資料の選択など、一ヶ月足らずのあわただしい編集作業の末、この報告書ができあがりました。

拉致問題シンポジウムにかかわったこと、多くの人の「拉致問題の早期解決」の想いを報告書として残すことができたこと、2007年の大きな仕事が今終わりました。

2007年12月

鳥取短期大学地域交流センター 雛倉 千恵子

拉致問題シンポジウム報告書

2007年(平成19年)12月発行

発行 拉致問題ミニシンポジウム中部地区実行委員会
(倉吉市生活環境部人権局人権政策課内)
TEL : 0858-22-4891 FAX : 0858-22-4901

印刷 山本印刷株式会社